

○方言に、木を作るより綿をつくれとて、随分枝はうるハしく付ても、余り木の長く伸ざるやうに仕立なる也。木の伸過て立派なるハ、木にばかり勞ひつきて、肝要なる桃の付方すくなし。随分枝に勢ひを付けて、桃太く粉の多きを、作り上手の農人といふ。是ハわけてよく／＼心を用べし。

(1) 河内国 現在の大府東部。(2) 若江郡 現東大阪市・八尾市などの一部。(3) 深田 強度の湿地。(4) 野地 手つかずの低湿地。(5) 河内木綿 のれん・湯衣・旗幟・半天・酒袋・雲斎・足袋地・緋などに加工された。(6) 毛肥 一番肥に動物の毛や月代のそり毛を入る指摘があるが、肥料にするほどそれらの毛が出るものではない。全く個人的な肥料であらう。(7) 月代 平安時代、男子が冠にあたるひたいぎわの頭髪を半月形にそった。そのそった部分。江戸時代には頭の中ほどにかけてそっていた。やはりその部分を月代という。

○方言に「木をつくるより綿をつくれ」とあって、ずいぶん枝は豊かに育つても、あまり木が伸びないように育てる。木が育ちすぎると、木ばかりがりっぱで肝心の実が少なくなる。枝を相当大きくして、実が太く粉を多くつくる人を「作り上手の農人」という。このことは、とりわけ良く心に留めておくべきである。

大坂の綿問屋にて

綿の善悪を論ずる事

諸国の綿の勝劣を論ずるにハ、作りかたにあらずれども、其心得をもて作る時ハ、其益少からぬ事なれば、開置るまゝを左に記す。

○大和国の綿ハ糸口にハ悪しきとて、中入口にする也。いかにといふに綿堅く、毛太く、殊に立綿操腰をかけたてくる故、土人立くりにてくり

に立綿操腰をかけたてくる故、土人立くりにてくりとすれば、真粉(手で廻して練る綿練りを真粉という。まことの綿くりにてくりたる粉という心)の綿操にてくるよりも手廻しよく、多く操出すなり。されどもくりたる所の粉、見付劣れり。按ずるにまた國中ハ真土がちなれば、綿もおもく、操粉もぼつとりとして、毛も太し。是土性のしからしむる所なれば、農人の力に及ばざる所也。愚考するに、砂地によく作りたる綿ハ色さえて、毛長くほそければ、糸口に宜し。爰をもて見れば、砂地の方綿にハ宜しきと思へる。

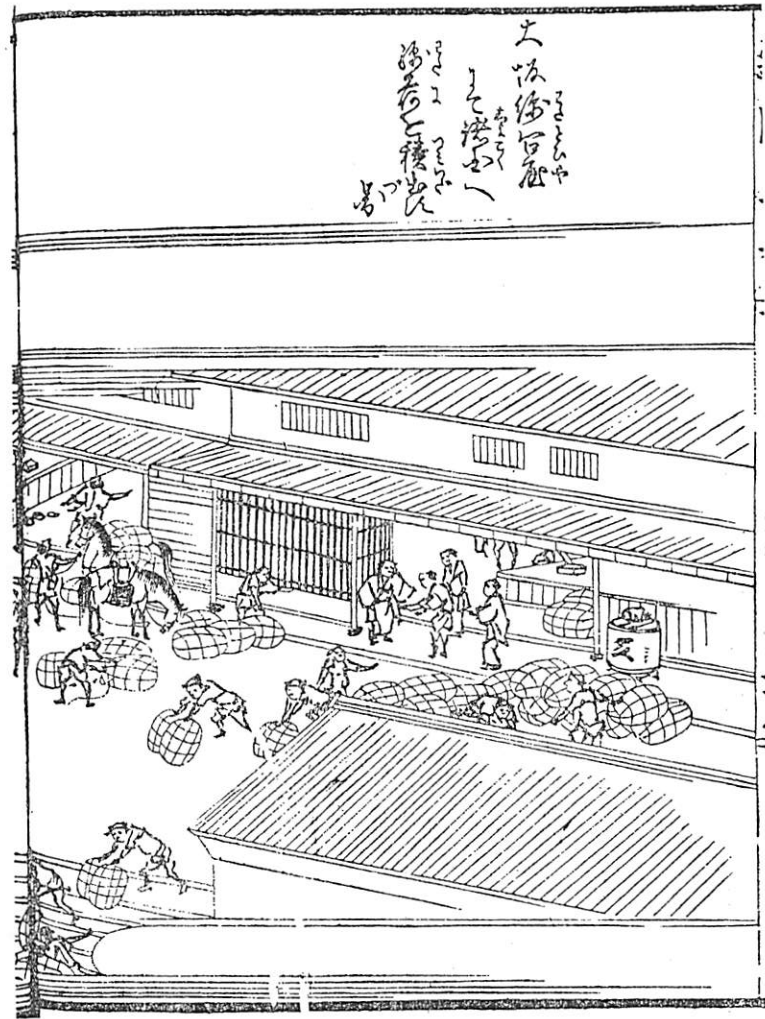
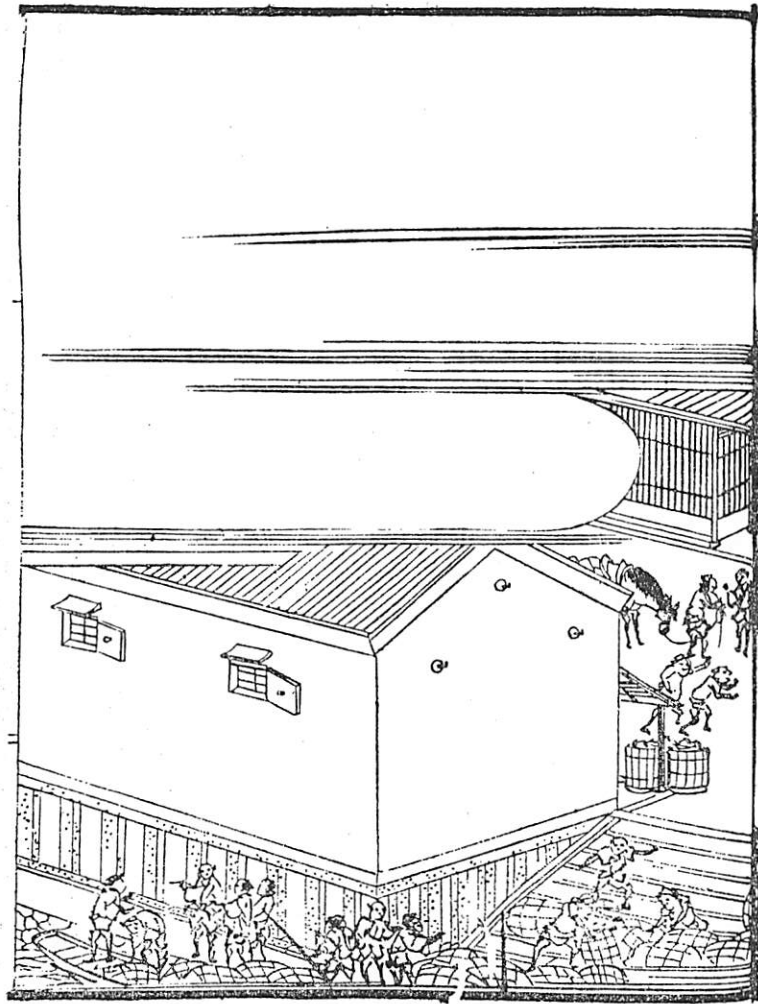
○摂津国の綿ハ色白くして見付よければ、十人好する也。殊に真粉の綿操にてくる故、操粉

大阪の綿問屋で綿品質の善悪を論じる

諸国の綿の優劣を論ずる。栽培法ではないが、その心得をもつてつくれば利益も上がるであらうから、聞いたまゝを左に記しておく。

○大和国の綿は、糸用には良くないので中入綿用にする。なぜかというのと、綿が堅く毛も太く、ことに立綿練り(腰をかけて立って練るので、土地の人は立練りといい、また綿練り馬ともいう)で練って、練り粉(練った綿を練粉というのは世間一般のことである。また粉が多いとか少ないとかいうのは、たぶん穀類の粉をいうのと同じように使っているであろう)にすれば、真粉(手で廻して練る綿練りを真粉という。思うに、真の綿練りで練った粉というつもりで、土地の人がいつているのだから)を綿練りで練るよりも手廻しがよく、多くを練り出す。しかし、練った粉は外見が劣っている。多分、国中は壤土が多いために綿も重く練り粉もぼつとりとしていて、毛も太いのである。これは土質によるもので、農民の力では左右できないことである。私の考えでは、砂地に栽培した綿は、色がさえて毛が長く細いので、糸用に向いているのであろう。これを思うと、砂地の方が綿作には向いていると思われる。

○摂津国の綿は、色が白く外見が良いので誰もが好む。ことに真粉の綿練りで練るため「練り粉は良質で糸用または小袖綿に向いている」と、



大坂綿問屋にて、
諸國へ綿荷を積出
す

見事にて、糸口又へ小袖綿にするに宜しとして、関東向にても撰津国綿を専ら好めり。寛政の頃迄撰津国も大和と同じく立綿操にてくりたる故、河内国より品劣りたれども、全立綿操にてくり、手入あしかりし故、品劣る事をしりて、追々真粉操を用ひたるによりて、世間のうけ方よくなりて、今河内綿よりも直段高直になりたり。兎角綿を多く収納しする事をよしとして、却而直段下落し、世間の評判あしくなりて其国の名産の名をけがし、直段も安くなるものなり。都て綿大房なれば品劣れり。近年土佐の国より来る種にて作りたる綿、大房にて桃の付かた多く、収納多きとて、大坂の近在ハ専作の事也。此綿糸口にならず。性合不_レ宜とて綿問屋にてハ甚迷惑するよしなり。又昔より有来る赤綿といへるハ、少し小ぶりにて、くり粉すくなけれども、細口の糸に用ふるに、糸細くつよければ、専ら好むなり。是等は其国所の

関東方面でも撰津の綿が多く好まれる。寛政のころまでは、撰津も大和と同じように立ち綿繰りで繰っていたために、河内よりも品質は劣っていたが、すべての綿を立綿繰りで繰り、手入れが悪いために品質が劣るということを知って、だんだん真粉繰りを使用するようになると、世間の評判も良くなり、今では河内綿よりも値が高くなったのである。とかく綿を多く収獲することばかりに力点を置くと、かえって直段が下落する。世間での評判も悪くなり、その国の「名産」という名を汚し、ますます直段も安くなるのである。全部の綿の房が大きくなれば、品質は劣ってくる。近年になって土佐から伝来した種でつくった綿は、大房で実の付き方も多く、収獲も多いので、大阪近在ではもっぱらこの品種を栽培している。しかし、この綿は糸用にはならない。糸とするには合性が良くないので綿問屋によく迷惑をかける。また昔からある赤綿というのは、少し小ぶりで、くり粉は少ないが細口の糸に使用すると、糸が細くて強いので好まれる。これらのことは、その国の農民は心得ておく必要がある。

農人心得有べき事なり。

○河内国の綿ハ撰津国の綿より少し色赤キ方なれども、大和其外の国に競れば色白キ方也。全体糸口にしてハ外の国よりも河内綿の方最上なるべしと、大坂の問屋のある老功の人々ハいへるよし。

○山城の国にてつくる綿ハ大坂問屋にてハ京綿と唱へ、丹波にて作る綿を丹州とて、大坂其品同じ位なれば、大坂の問屋にてハひつくるめて京丹と唱へ、撰津国の二番綿と同一に定め、直段も同じ位に立る也。

○五畿内辺にて作る所の綿ハ、皆大坂へ出すなり。大坂より諸国へ廻す中に、江戸へ積事を専らす。尤江戸積問屋数軒ありといへども、六軒の間屋を上銘と号し、大坂多くの問屋より船積の通達あれば、右六軒の家々の印をもて江戸にて相場を立、売買する也。先其六軒の間屋といへるハ、

○河内の綿は撰津の綿よりも少し色が赤みがかっているが、大和や外の国に比較すると色は白いほうである。「全般的に糸用の中では、ほかの国のものより河内綿のものが最上である」と、大阪の間屋のベテランの人たちはいう。

○山城で作る綿は大阪問屋では京綿といい、丹波で作る綿を丹州といい、ともに品質は同じくらいである。大阪の間屋では、両方をひつくるめて京丹といつて、撰津の二番綿と同一に定め、直段も同じくらいに仕切られている。

○五畿内辺でつくる綿は、すべて大阪へ運び出す。大阪から諸国へ運び出すのであるが、そのほとんどは江戸へ向けて積み出す。もともと江戸に積み問屋が数軒あるというが、六軒の間屋を上銘と号して、大阪の多くの問屋から船積みの通達があると、この六軒の店の印を持って、江戸に相場を立てて売買するのである。その六軒の間屋とは、

- 天 燒印 大坂小町三丁目
- 冬 燒印 扇屋与兵衛
- 名 燒印 同長堀三休庵
- 春 燒印 桑名屋三四郎
- 夏 燒印 同長堀茂左衛門町
- 秋 燒印 小堀屋武兵衛
- 冬 燒印 惠比須屋伝兵衛
- 春 燒印 同高麗橋西詰
- 夏 燒印 同今橋西詰
- 秋 燒印 松坂屋新三郎
- 冬 燒印 同天神橋南詰
- 春 燒印 大鶴屋九藏

右六軒江戸積を多くする家にて、各江戸に得意有て、毎ヶ年一軒の間屋にて凡三四万兩づゝ商ひする事也。此余諸間屋より送るなり。又大坂より北国・東国へ運送する事すくならず。

○又綿を作る國々に問屋ありて、作らざる國々へ運送するも多し。先中国にてハ、備後国福山・安芸の国広島・備中国玉嶋・播州高砂・摂州兵庫 此外四國より多く西國へ送る也。其余ハあげてのべ尽しがたけれバ、見聞の荒ましを記す也。前論にも云如く、天文 天保三辰年まで・文

右の六軒は江戸積みを多くする店で、それぞれ江戸に得意があり、一年一年間の問屋で約三、四万兩づつを商う。このほかに諸間屋から送っている。また大阪から北国、東国へ運送することも少くない。

○また綿を栽培している國々に問屋があり、栽培していない國々へ運送することも多い。まず中国地方では備後の福山・安芸の広島・備中の玉島・播州の高砂・摂津の兵庫、そのほか四國から多く西國へ送るのである。そのほかの例をあげ尽すには多すぎるので、見聞したあらましを記した。前にも述べたように、天文(天保三辰年まで約三百年)、文祿(天保三辰年まで約二百年)のころまでは、絶えて栽培することもなかったのであるが、今は各地で栽培し、あらゆる人々の生業と

大坂本町三丁目

扇屋与兵衛

同長堀三休庵

桑名屋三四郎

同長堀茂左衛門町

小堀屋武兵衛

同高麗橋西詰

惠比須屋伝兵衛

同今橋西詰

松坂屋新三郎

同天神橋南詰

大鶴屋九藏

天保三辰年迄凡の頃迄ハ、たえて作る事なかりしが、今ハ國々につくりて、諸人の業ハ倍となり、人口を養ひて飢す。第一ハ夥しき世界の人の身をこゝえしめず、誠ニ天の賜にて、ありがたき靈草なれば、尊べし。

綿圖要務 下之卷 終

天保四癸巳年十月発行

- 大坂心齋橋博勞町
- 河内屋長兵衛
- 江戸日本橋通一丁目
- 須原屋茂兵衛
- 同通式丁目
- 小林新兵衛
- 同小伝馬町三丁目
- 丁子屋平兵衛

なつて、人々を養ひ、飢をしのがせている。第一には、すべての人々の身を包み、寒さから守り、まさに天の恵みで、ありがたい靈草であるので尊重すべきである。

綿圖要務 坤の卷 おわり

天保四年十月発行

- 大坂心齋橋博勞町
- 河内屋 長兵衛
- 江戸日本橋通一丁目
- 須原屋 茂兵衛
- 同通一丁目
- 小橋 新兵衛
- 同小伝馬町三丁目
- 丁子屋 平兵衛

(1) 勝劣 原本のふり仮名「い」は「つ」の誤まり。(2) 中入口 中入綿用。(3) 土人 その土地の人。(4) 小袖綿 網の綿入れの衣服に入れる綿。(5) 下之卷 本来は「坤之卷」とすべきであらう。